正義の味方。

零雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正義の味方。

【Ｎコード】
Ｎ９９２８Ｈ

【作者名】
零雅

【あらすじ】
あたしの大好きな人。いつもあたしを守ってくれた幼馴染はもういない…。

「亜美を泣かしたらブッとばす！！」

これか君の小さい頃の口癖。

こう言っていつもあたしを守ってくれた。

今でもあたしを、守ってくれますか？

久しぶりに夢を見た。

小さい頃の夢。

あたしがいつものように近所のいじめっ子にいじめられてて

いつものように祐真が助けに来てくれた。

そして最後にいつもの一言。

たまに見る小さい頃の夢には必ずといて良いほど祐真が出てくる。

「亜美、また授業中寝てたでしょ？」

あたしの名前は、川崎亜美。

この高校に通う2年生。

「う～ん、午前中は眠い～」

「あんたの場合、午後はお弁当食べ過ぎて眠くなるでしょ！

どっちかはしっかりやらないと成績落ちるよ」

「それはやだけど…」

これでも家では一様勉強してる。

だから、いつも担任の先生に

「お前は、授業聞いてればもっと成績上がるのになぁ…」

とため息をつかれてる。

別に中の中なら良いと思うんだけど。

「また祐真くんの夢でも見てたんでしょ？」

「なっ…なんでわかるの？」

「顔がにやけてたし、起きた後も目覚め良さそうだったから」
あたしって、そんなに寝起き悪いの？
確かに起きてるはずなのにちゃんとした記憶がない。
「ほら、お弁当早く食べないと授業始まっちゃうよ」
いつもあたしを起こしてくれる親友の「柳　美香子」に連れられて教室のベランダに向かった。
この学校のベランダはお弁当を食べられるくらい広く作られてる。
実際、ベランダを使うことなんてあまりないからあたし達はいつもここで
お弁当を食べている。
チラリとグラウンドの方に目をやると
昼休みの時間を使ってサッカーをやっている男子の姿が見えた。
でも、あたしがいつも目で追ってしまうのは…
紛れもなくあたしの幼馴染の祐真だ。
祐真は小さい頃とは打って変わってすごくかっこよくなった。
シュートを決めるだけで大勢の観客の女の子から黄色い歓声が上が

る。

背は高いし、髪も少し色素が薄いけど地毛。

真っ直ぐに伸びた癖のない髪が走るたびになびく。

他の選手と違って、祐真はしっかりとその女の子達の声援にこたえて手を振る。

その笑顔が更に女の子達を盛り上がらせる。

あたしはそれをいつも上から眺めるだけ。

祐真はサッカー部のエースだ。

でも、一度もあたしは応援には行ったことがない。

祐真はいつも仲の良い女の子達を試合の応援に呼ぶ。

なのにあたしだけは呼んでくれない。

同じクラスだし、なにより幼馴染なのに。

今、一緒にお弁当を食べている美香子ですら何度か声をかけられているらしい。

本人はサッカーより野球の観戦のほうが好きらしくいったことはないらしいけど。

でも、美香子だけじゃない。

このクラスの子だったら一度は声をかけられてる。
行ったことがないのなんてあたしぐらいなものだ。
…なんで…誘ってくれないのかなぁ…。
「そりゃ、あれでしょ。照れ隠し」
「え？」
「いや、だから誘ってくれない理由」
…もしかして今の声に出てた？
美香子以外に聞かれてたら恥ずかしい～。
「でも、なんであたし相手に照れ隠し？
一様ずっと一緒にいたんですが…」
「さぁ～？
自分で聞いてみたら答えが出るんじゃない？」
「そんなの…」
聞けるわけがない。
小学校の頃は毎日一緒に登下校して、

休みの日もよく二人で遊びに行っていた。

でも、中学校に入ってあたしと祐真は違う学校に通うことになってしまった。

幼馴染といってもお母さん同士が仲良いだけであたし達の家はギリギリだけど学区が違う。

でも、祐真の学区には小学校がなくて少し遠いけど

あたしを迎えに来てくれて一緒に通ってた。

でも、中学校となると祐真の学区にも新しく出来ていて

あたし達は離れてしまった。

「別に学校が違ったって会えない訳じゃないだろ？

お前もちゃんと友達で来たし。大丈夫だ」

当時、極度の引っ込み思案だったあたしが友達を作れたのはほとんど祐真のおかげ。

今では、当時の名残はあるものの誰とでも気軽に話しができるようになっていた。

でも、あたしにとっては寂しかった。

祐真と離れるなんて考えられなかったけど

そんな風に言い切った祐真を見て安心した。

だけど、それからあたし達が会って遊んだりする回数は目に見えて減っていった。

それは確かに当たり前のことなんだけど、年を重ねるごとにそれは激減していって。

最後の中学三年の春にはもう三ヶ月くらい祐真とあっていなかった。

何度か誘ったけど、いつも二人の予定が会わなくてダメになってしまった。

結局、三年生になった一年は片方の手で数えられるくらいしか会わなかった。

それも単にお母さん同士が話してるときに少しだけあっただとか、そんな程度。

そんなあたし達も高校生になった。

入学式に来て本当にびっくりした。

祐真があたしと同じ学校に通うなんて一言も聞いていなかったから。

本当に嬉しくて、嬉しくて祐真の元へ飛んでいってなんで言ってくれなかったのかを問いかけた。

でも、

「別に俺の勝手だろ？」

帰ってきたのはそんな返事。

あの頃とは全く違っていて、口調も冷たくてまるで他人を見るような目だった。

入学式を終えて帰ってきてから、あたしは泣いた。

折角、また一緒に登下校できるかななんて、思ってたのはあたしだけで。

祐真はもうとっくにあたしのことなんて忘れてしまったんだ。

それ以来、あたし達は学校で顔を合わせるだけ。

話なんて一切しないし、気まずくなるのが嫌であたしから祐真を避けた。

これ以上、期待してもしょうがないと思ったから。

それからあたしの祐真を眺めるだけの生活が始まったんだ。

このことを打ち明けたのは小学校で始めて出来た友達の美香子だけだった。

「亜美？」

「ふぇ？」

「何上の空になってんの、人が話してる時に」

「あ、ごめん。

で、何の話だっけ？」

どうやらあたしは考え事をしてると勝手に口が動くか、上の空になってしまうらしい。

「いやいや、あたしじゃなくて岩崎君」

美香子に言われて上を見上げるとクラスメイトの岩崎君と目が合った。

「どうしたの？」

岩崎君はちょっと不良タイプで苦手。

でも、かっこいいと評判で女の子付き合っては振ってを繰り返してるらしい。

最近は学校をサボってるらしく、見かけたことがなかった。

そんな岩崎君があたしに話し？

「だから放課後、屋上に来てくれない？」

「うん、いいけど…」

「んじゃ、忘れるなよ」

ひとしきりあたしに約束を取り付けてベランダを出て行った。

「もしかして告白じゃないの？」

美香子が意地悪にそう言う。

「でも、気をつけなよ。

あいつ顔は良いけど女たらしだし。

変なことされないようねに」

「だ、大丈夫だよ！

岩崎君ってすごく可愛い女の子としか付き合わないって言うし、

あたしなら変なことも何も告白だってされないよ！」

「あのね～、あんたいい加減に自覚しなさいよ？

亜美はメチャクチャ可愛いんだから！

無防備すぎてたまにあたしの方が心配になるわよ」

よく美香子は、あたしの事を可愛いって言ってくれるけど

あたしは自分をそんなに可愛いとは思わない。

だって、性格も引っ込み思案なだけに誰とでも気軽に話せるような明るい女の子じゃないし。

むしろ美香子はとびっきりの美人。

どちらかというとあたしは美香子の方が心配だ。

でも、話って何だろう？

もしかして美香子のこと？

そんなことを考えながらあたし達は次の授業に備えて教室に入った。

「良い？

もしも岩崎君に変な事されそうになったらすぐに逃げるのよ？

分かった？」

「分かってるって～、

さっきからその話、三回は聞いてるよ？」

「ん～そうだけど…」

「大丈夫だって！ね？」

「…分かった。

教室で待ってるから終わったら来てよね」

「うん」

放課後になった学校のグランドではもうすでに部活が始まっていた。

あたしと美香子は帰宅部だから授業が終わったらすぐに帰宅する。

でも、今日は岩崎君との約束を果たしに屋上へ。

美香子に何度も念を押されながら階段を上った。

廊下の窓から外を眺めるとサッカー部もすでに練習を始めていた。

そこにいつもの姿を探す。

あれ…？

祐真がいない。

祐真は授業が終わると一目散に教室を出て、

一番初めに練習を始める。
はずなんだけど。
今日はなぜだかその姿がない。
目でも悪くなったのかな？
目をこすってもう一度探してみるけどやっぱりいない。
そのうちに廊下の突き当たりにさし当たった。
この階段を上ればすぐに屋上だ。
テンポよく階段を上がると、あたしは扉を開け放った。
するとそこには、すでに岩崎君が立っていた。
早いなぁ～、って思ったけどよく考えたら午後の授業をサボってた。
あたしに気づいたのか岩崎君はあたしの方へ向き直った。
「早かったね。
で、話なんだけど…」
い、いきなり本題に入っちゃうの？
なんかこっちの心の準備が…。

「俺、川崎のことが好きなんだけど。
俺と付き合ってくれない？」
「え、えっと…」
美香子の言ってたこと当たってたんだ…。
でも、どうしよう？
あたしには好きな人いるし…。
好きな人いるのに、ここで返事しないのは悪いよね？
「ごめん…、あたし好きな人がいるんだ…」
うつむいて答える。
なんだか岩崎君の顔を見て言うほどの余裕がなかった。
「ふ～ん、あっそう」
ふぇ？
思いがけないほど軽い返答が帰ってきた。
もしかして、なんかの罰ゲームだったとか？
確かにそれなら納得がいく。

罰ゲームで呼び出されたのには納得がいかないけど。

「じゃぁさ？

川崎のこと諦めるから最後にキスしてよ」

「うん…って、え！！？」

またもや上の空になっていたあたしは、危うく頷き切るところだった。

で、でもキスしてって何？？

「最後の思い出って奴？

してくれなきゃ諦められそうにねぇんだけど」

「そ、そんなこと言われても…」

あたしは彼氏いない暦＝年齢だからキスとかしたことないけど、

そんなに軽いものなの？

「あ、もしかしてファーストキス？」

み、見抜かれた…。

「そうだけど」

「よっしゃ、じゃぁなおさらキスさせてもらうわ」

気づかぬうちにそばに来ていた岩崎君とあたしに距離はほぼわずか。
逃げようとしたけどそれもむなしく力強い手で手首を握られる。
後ろにもすぐに壁があって逃げられない。
や…もしかして本当にされちゃうの??
混乱してうまく声もでない。
あたしがもたついてる間にもどんどんと詰め寄られる。
「や…やめてよ…」
かすれた声のあたしの抵抗も聞こえるはずもなく、壁に押し付けられたあたしは…
「ん…」
キスされてしまった。
抵抗も出来ないあたしは唇をふさがれたまま、壁にずるずると腰を落としてゆく。
なんであたしなんかが?
こんな目にあうんだろう…。
小さい頃だったら、いつも祐真が守ってくれたけど、

もうあたしを守ってくれる祐真はいない。
でも、抑えられない気持ちを唇が離れた一瞬で叫んだ。
「ゆ…祐真…！！」
「誰それ？もしかしてサッカー部の…」
ガタン…。
勢いよく扉が開いた後に聞こえた、久しぶりに聞く愛しい声。
「俺じゃ悪いかよ」
「なっ…なんでお前が…」
「幼馴染だから」
うろたえる岩崎君に間髪いれずに祐真が答えた。
でも、あたしはその祐真の言葉にうろたえた。
まだ…あたしのこと幼馴染だって言ってくれるの？
「こいつのこと、守るのが俺の役目だから」
「は？何言ってんだよ、お前。
俺たちは今、付き合ってんの」

岩崎君が口からでまかせを並べる。

違うよ…。

あたし岩崎君となんか付き合ってない…。

「それがなんだよ」

「は？」

「お前らが付き合っていようと、

亜美が嫌がってたら俺が守ってやらなきゃいけないんだ。

今の亜美は、俺には悲しそうに見えたから。

だから助けに来た」

「意味わかんねぇし…。

何？正義の味方きどりかよ。

てか、川崎となんか付き合ってねぇし」

そういって岩崎君はずっと握っていたあたしの手首をはなして屋上を出て行こうとする。

「おい、岩崎！」

それを祐真が呼び止めた。

そして、久しぶりに聞くあの一言。

「今度、案の子と泣かせたらブッとばす！」

その言葉に追いやられて岩崎君は屋上を出て行った。

でも、あたしはそれどころじゃなかった。

久しぶりに聞いた言葉や名前に涙でぐちゃぐちゃだった。

「おい…、大丈夫か？」

祐真があたしのそばに来てしゃがみこんだ。

「うん…ありがとう」

そうあたしに問いかけた声は、小学校の時と同じで

優しくてあたしをいつも心配してくれていた暖かい声。

あぁ…余計泣けてきちゃうよ…。

「なっ、なんで泣くんだよ…」

泣き出したあたしにうろたえる。

「だって…、祐真があたしの幼馴染って言ってくれたから…。

後…祐真とこんなふうに話すのも久しぶりだし…」

「え…それは…」

あたしはずっと心の中にあったもやもやを吐き出した。

「何で…前みたいに話しかけてくれないの？

祐真は…あたしのこと嫌いになっちゃった？」

「……ねぇよ…」

祐真が風に髪をなびかせながらうつむいく。

心なしか顔が赤い。

「祐真？」

「だから～～～～～」

顔を真っ赤にした祐真があたしに叫ぶ。

「んなわけねぇって言ってんだろ！

お前のこと嫌いになるなんて…ありえねぇし」

あたしは祐真の言葉の一つ一つに涙が出てくる。

いつも以上にあたしの頭の中が祐真でいっぱいになっていく。

「俺…ずっとお前のこと好きだったんだ…」

「ふぇ？」

「だから！！二回も言わせんなよな…」

祐真が？

あたしの事を好き？

「中学になってお前と離れてみて…、

やっと俺は亜美が好きだったんだって気づいたんだ。

でも…俺そういうの疎いから…。

しかも幼馴染だしそうしたら良いか分からなくて…」

恥ずかしそうに中学のときのことを話してくれる祐真はすごく可愛く見えた。

「本当は…お前が受けるって言うからこの高校目指したんだ…。

でも、やっと会えたそばから冷たくしちまって…。

友達とも仲良さそうだし、もう俺のこと忘れたのかなと思って…」

「そんなわけないよ！！」

祐真の声をさえぎったあたしの声は自分でもびっくりするくらい大

きな声だった。

「あたしだってっ…、本当は寂しかった…。

ずっと祐真と会いたくて同じ高校だって分かったときはすごく嬉しかった…。

でも、どう話かけて良いか分からなくて…」

またぽたぽたと涙が落ちてくる。

そんなあたしを見かねてあたしの顔を覗き込む。

「ごめんな…？

俺がお前に冷たくしたから…。

だから、頼むから泣くのやめろよ」

「？なんで？」

「…顔赤らめて、しかも涙目で上目遣いとか…マジでやばい」

そんなこと言ったって涙は止まってはくれない。

でも、あたしからも伝えられることはある。

祐真はあたしに言ってくれた言葉。

あたしも言わなくちゃいけない言葉。

「祐真…あたしも…

祐真が好きだよ？」

少し目を見開いた祐真は最高の笑顔をあたしに見せてくた。

「ひゃぁ！」

と、思ったらいきなりあたしを抱き寄せる。

「お前、可愛すぎ。

てか、マジ嬉しいんだけど…？」

ちょっと恥ずかしいけどあたしも背中に手を回す。

「あたしも…すごく嬉しいよ…」

祐真があたしの言葉と共に抱きしめる手を強める。

「これからはずっと…

俺がお前を守るから」

抱きしめる力を緩めた祐真は、

ゆっくりと目を閉じてあたしにキスをした。

その帰りは、美香子に冷やかされながらも祐真と二人で帰った。

「俺さ、今度の試合が土曜日にあるんだ」

「へぇ～祐真はエースだもんね？

小さい頃からうまかったし」

「今の俺は小さい頃とは違うんだぜ？」

「うん、知ってる＾＾」

「え？なんで？」

なんでって…、いつもベランダから見てたし…。

なんて言えないけど。

「なぁ！何で知ってんの？」

どんどんと祐真の笑顔がいたずらっぽくなっていく。

ぜ、絶対楽しんでる…！

「言ってくれねぇの？」
優しい声でささやく。
あぁ、ずるい！
「えっと…、いっつも見てたから…。
昼休みとかっ…放課後とか…」
恥ずかしさのあまり顔が熱くなっていくのが分かる。
何言ってるんだろ…、あたし。
チラリと祐真の表情を伺うと、
「今俺のこと見るなっ」
顔が赤い。
もしかして、照れてる？
あたしとは逆の方向を向いてるけどそのせいで余計に顔の赤さが分かる。
「祐真？」
今度はあたしが意地悪く言う。

「だって…お前が素直にそーいうこと言うのって
滅多になかったし…慣れてねぇんだよっ」
なんだかあたしの言葉に祐真が赤くなってるのがすごく嬉しかった。
そろそろあたしの家に着く。
「祐真？こっち向いてよ」
「…ん」
顔を赤らめてる祐真の目をしっかりと見て、今度はちゃんと言えた。
「好きだよ」
それだけ言って玄関に入る時、少しだけ見えた祐真の顔は
さっき以上に真っ赤だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9928h/

正義の味方。

2010年10月17日03時56分発行